

蔵書印譜私稿 (五)

凡 例

大江 令子

- 一、本稿は本館所蔵資料に見られる蔵書印を紹介するものである。
- 一、従来の蔵書印譜等に紹介される機会の少なかったもの、或いは、本学及び本館に関係の深いものから掲げることがを心がけ、やがて他へも及ぶつもりであるが、印影の紹介を眼目とし、年代・分野等に捉われず掲出することとした。
- 一、排列は人名（印の使用者名）の五十音順とする。
- 一、印影は原則として原寸大とする。印色は個々の原色を再現するは困難なため、朱・墨等、近似の色を以って示した。
- 一、必要と思われるものには印文の読みを記した。
- 一、印の使用者の経歴等、簡略な解題を付した。参考文献は一々あげないが、既刊の事典・印譜・評伝等を参照した。
- 一、解題末尾に、印を採集した資料名を添えた。

前回に続き中村俊定文庫の印を中心にとりあげた。周知の印も掲げたこと、前回と同様である。加えて今回はいくつかの印について使用者の経歴未詳のまま掲出した。遠藤蓼花、竹内琴涯といった方などは生没年の確認もできていないが、あえてここにとりあげ、識者のご示教を待つこととした。

なお中村俊定文庫以外の資料から採った印には、印影と採集資料名に \*印を付した。

(おおえ よしこ 図書館国内図書課)

## 目次

淡島	寒月	木崎	好尚	永田	有翠
石井	研堂	笹野	堅	花岡	百樹
遠藤	蓼花	鈴木	真年	馬場	錦江
荻野	清	竹内	琴涯	浜	和助
川西	和露	中川	德基	水落	露石



淡島 寒月（一八五—一九二六）

小説家、俳人。安政六年江戸日本橋生れ。父は画家淡島椿岳。本名宝受郎、別号愛鶴軒、梵雲庵。福沢諭吉の影響を受け西洋文化に心酔したが、明治十三、四年頃、山東京伝の『骨董集』を読み急速に江戸文学に傾倒、とりわけ西鶴にひかれ、西鶴の作品を蒐集してはその意義を当時の文壇に紹介、明治期における西鶴再評価、元禄文化復興の機運を生み出した。禅、考古学、キリスト教、進化論など様々な思想遍歴の後、晩年は東西の玩具蒐集に熱中した。著作は小説『百美人』『馬加物語』がある他、没後『寒月遺稿連句集』『寒月句集』『梵雲庵雑話』が出た。大正十五年没。

『誹諧句選』享保二十年刊





石井 研堂 (一八五—一九四三)

編集者、明治文化研究家。慶応元年福島県郡山生れ。本名民治。明治十八年上京し岡千仞に漢学を学ぶ。二十二年明治期の代表的少年雑誌「小国民」(のち「少国民」)の編集主任となり健筆を揮う一方、『理科十二ヶ月』『少年工芸文庫』など少年向け科学書を出版。明治文化研究をライフワークとし、四十一年に畢生の大著『明治事物起原』を刊行。大正十三年吉野作造、尾佐竹猛らと明治文化研究会を興し、『明治文化全集』編纂に尽力、明治文化研究における第一人者であった。釣の名著『釣遊 釣師氣質』、評伝『中村正直伝』、海洋小説『鯨幾太郎』など多方面に先駆的業績を遺した他、古銭・錦絵の蒐集と研究でも知られた。昭和十八年没。

『秋の籟』享保十一年刊





「  
華園  
文庫  
」

遠藤 蓼花

俳人。関西の人。中村俊定先生によれば、蕪村関係の俳書を多く蒐集したという。

『誹諧尚齒会』天明五年刊





荻野 清 (一九〇四—一九六〇)

俳文学者。明治三十七年愛知県名古屋古屋市に生れる。京都大学国文科卒業。高野山大学教授。芭蕉の研究家として知られ、とりわけ芭蕉の書簡研究に、『芭蕉講座』(書簡篇)などのすぐれた業績を遺した。芭蕉に関する論文を集めた『芭蕉論考』、芭蕉と同時代の六俳人(鬼貫、素堂、言水ら)の作品を出典年代順に集めた『元禄名家句集』などの編著がある。昭和三十五年没。没後、著作集『猿蓑俳句研究』『俳文学叢説』が刊行された。

『報恩集』十三系 上 明和四年序刊



## 川西 和露 (二七五—二九五)

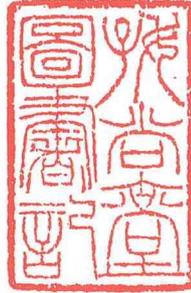
俳人、俳書蒐集家。明治八年神戸生れ。本名徳三郎。神戸商業を卒業。鉄材商を営み、神戸市会議員をつとめた。俳句を河東碧梧桐に師事、短律の句をよくした。大正三年神戸より俳誌『阿蘭陀渡』を刊行、関西における碧梧桐門の主力作家として重きをなした。古俳書の蒐集につとめ、その蔵書によって『蕉門珍種百種』三十五冊、『和露文庫』五編が翻刻・刊行された。『和露文庫俳書目』(頼原退蔵・川西和露共編、昭和十三年)によりその内容が知られる。没後、古俳書は天理図書館に、活字本は神戸市立図書館に収められた。昭和二十年没。

和露の蔵書印は掲出したものの他、丸に「和露」、丸に三つ柏紋入「和露文庫」、「和露俳庫」、「和露俳書」など十種近い印が知られている。

『年  
賀老木の芽前』宝暦九年序刊







「好尚堂  
図書記」

木崎 好尚 (一八五—一九四)

新聞記者、金石文・近世文学研究家。慶応元年大阪に生れる。本名愛吉。明治二十四年西村天囚らと雑誌『なにはがた』を創刊。二十六年大阪朝日新聞に入社、文芸部などで編集に従事。大正三年朝日退社後は金石文研究に専念、同十年『大日本金石史』三巻を刊行、これにより学士院賞を受賞した。晩年は山竹会、山陽会を主宰して頼山陽、田能村竹田の研究にあたり、『頼山陽全書』八巻、『田能村竹田全書』三巻などの成果をあげた。昭和十九年没。

『秋風庵文集』天保四年跋刊





\*

## 菅野 堅 (一九〇一—一九六二)

国文学者。明治三十四年静岡岡県志太郡藤枝町に生れる。昭和二年早稲田大学文学部卒業。東京女子大学、北京師範大学、善隣大学等の教授を勤める。室町・江戸期の文芸、能狂言、歌謡などの広範な研究を展開したが、とりわけ大藏虎明・虎寛本の紹介、最古の狂言本『天正狂言本』の発見など狂言台本の発掘紹介に功績をあげ、狂言研究の基礎を築いた。善本稀書の蒐集で知られた。編著に『室町時代小歌集』『斎藤徳元集』『能狂言』(岩波文庫)、『古本狂言集』(同上)、『狂言不審紙』などがある。昭和三十六年没。

『桑のねかひ』影写本

『大八録』細井広沢自筆\*





鈴木 真年 (一八三一—一八九四)

系譜学者。天保二年江戸神田に生れる。幼名房太郎、俳号松柏。十九歳で家督を次弟に譲り、剃髪して不存と号した。安政五年父の死を機に還俗し名を源牟知良と改め、新田愛氏と号す。のち鈴木舎人と改称。栗原信充に故実を、平田鐵胤に国典を学び、系譜学に長じた。上総大多喜藩に仕えたが、慶応元年紀州藩の懇請により藩士となり系譜編纂事業に参画、のち弾正台、宮内省、陸軍省等を歴任。明治二十一年より東京帝大の大日本編年史の編纂に従事。晩年は鴻池家などの求めに応じ大阪へ赴き、国学校の設立および熊野神社復興に尽力した。『苗字尽明解』『姓氏俗解』『史略名称訓義』等著書多数。明治二十七年没。

『四季詞寄杉のしをり』文化八年刊





「琴涯  
図書」

## 竹内 琴涯

俳人。地方史研究家。伊勢の人。伊勢の俳書蒐集につとめ、昭和九年「神都俳人遺墨展覧会出陳俳書略解題」を著した。所載総点数七十九点のうち六十四点が琴涯の出品にかかり、掲出印のある『誹笈塵集』の書名も掲がつている。

中村俊定先生によれば、伊藤松宇の俳書解題の手伝いなどしていたという。

『誹笈塵集』延享四年序刊





「中川氏蔵」

中川 德基 (一八三一—一九一五)

天保四年生れ。字月槎、得楼と号す。東京下谷練堀町に住す。旧幕時代は代官所手代を勤めたという。蔵書家として知られ、自筆の「蔵書目録」十二冊が国会図書館に架蔵される。幸田成友によれば、生前から、乞う者には惜し気なく蔵書を与えたといい、その蒐書はまとまつた形では伝存しない。館蔵の中川德基旧蔵書は、中村俊定文庫に二部ある他、式亭三馬自筆『身のむかし』など数部眼にしている。大正四年没。

『いせのはなし』写本



永田文庫

永田 有翠 (一八七一—一九三)

実業家。慶応三年大阪に生れる。名は春意、好三郎と称す。十三歳で祖父以来の名家、鴻池本家へ勤仕、同家にて成長する。長じて鴻池銀行京都支店の管理にあたった。生来書物を好み、大阪で有数の蔵書家としてきこえた。同好の士と愛蔵書を披露しあう「保古会」を結成。会友に浜和助、水落露石、平瀬露香、加賀豊三郎、幸田成友、木崎好尚らがいた。また露石の句会「下萌会」に属し俳句もよくした。大正十年の没後、蔵書は二度にわたって売立られ散逸したが、十一年の売立目録(雑誌「みをつくし」二に覆刻)により、その蒐書の大要が知られる。館蔵の有翠旧蔵本のうち、古浄瑠璃『あふひのうへ』『鳥羽恋塚物語』、俳書『宝蔵』、仮名草子『本朝浜千鳥』等の書名が売立目録に見えている。

『山の井』慶安元年刊





「百樹の」

花岡 百樹 (一八七一—一九〇六)

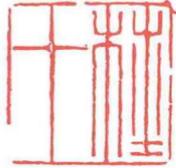
古川柳研究家。明治二年長野県上田の生れ。大阪住。名茂三郎、別号澤巴堂、やまとの好成、花実園など。銀行勤務の傍ら古川柳の研究につとめた。『川柳類纂』(明治三十八年)の編がある。昭和二十一没。

『俳諧力車』元文四年序刊





錦江廬  
圖書記



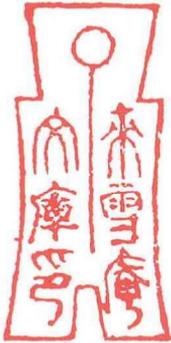
柱



從吾樓



來雪庵  
正統印



## 馬場 錦江 (1601-1660)

俳人、和算家。享和四年江戸四谷に生れる。名正統、字貫卿、通称小太郎。初号藜呷、別号紅白庵、桃葉庵等。父正督(号貢湖、藜々翁)は幕臣で和算家、江戸俳壇の一派葛飾蕉門其日庵八世。幼少より算法、誹諧を父に学び、古賀洞庵に経義文章を修める。諸学諸芸に長じ召されて小十人組の番士に列す。天保十四年其日庵九世を継承、翌弘化元年家督を相続した。和算家として『真積算梯後篇』『同解義』等著わす一方、『七部集通旨』『奥之細道通解』等、生涯に九十余篇の俳書を著した。中でも『葛飾蕉門分脈図』をはじめとする多数の詳細な系譜を編んだことで知られる。万延元年没。

『四季の讀』延享二年序刊  
『葛飾正風秘書梅の葉』馬場錦江自筆





浜 和助 (一八四一—一九二二)

弘化三年生れ。真砂と号す。大阪淡路町五丁目で質屋を営む。大阪の珍書持ちとして知られる。永田有翠ら大阪の愛書家とともに、架蔵の稀書を披露しあう「保古会」を創立。謙虚な人柄で会友の敬愛を集めたが、生前自己の経歴について遂に語らなかつたという。明治四十四年没。

『古今物わずれ』明和九年刊



# 水落文庫

\*

## 水落 露石（一八三—一九五）

俳人。明治五年大阪市東区南久宝寺町に生れる。家は小間物問屋。幼名義弼、初号石出、別号聴蛙亭。十二歳で家督を継ぎ庄兵衛を襲名。俳句は正岡子規に師事し、京阪満月会を興し、大阪満月会を作るなど大阪俳壇の中心的存在であった。古書蒐集と誹諧研究で知られたが、とりわけ蕪村を好み、明治三十三年『蕪村遺稿』を出版。また蛙を愛し、蛙の句を集めた『圭虫句集』を刊行した。みづから句会「下萌会」を主宰、永田有翠がその有力な会友であった他、「保古会」にも参加、浜和助、幸田成友をはじめ関西の愛書家と広く交遊した。大正八年没。

遺著に「聴蛙亭雜記」（大正十年）がある。

『吉原こまさらい』寛文年間刊\*

